学苑・人間社会学部紀要　No. 952　1～10（2020・2）

〔論　　文〕

青年期における友人グループに所属する理由
――学校段階，性別による検討――

杉田　綾香・松永しのぶ・河野　義章

Reasons for Belonging to Groups of Friends during Adolescence: An Investigation Based on Educational Stage and Gender

Ayaka SUGITA, Shinobu MATSUNAGA and Yoshiaki KONO

The present study aims to clarify the reasons why adolescents belong to groups of friends, and to investigate differences by educational stage and gender. We analyzed the results of questionnaire surveys answered by a total of 556 junior high school, high school and university students (275 males and 281 females).

A total of 499 individuals (89.7%; 241 males, 258 females) belonged to a group of friends, and the mean size of these groups was 5.82 individuals (*SD*=3.69) overall, 6.27 (*SD*=4.19) for males, and 5.41 (*SD*=3.12) for females.

As a result of factor analysis, there were three reasons for belonging to a friend group: “Avoidance of isolation”, “emotional support” and “information sharing”. “Avoidance of isolation” and “information sharing ” were higher among high school students and university students than junior high school students, while “emotional support” was higher among female students than male students. It was confirmed that there are two reasons for belonging to a group of friends in adolescence: a passive reason, avoiding isolation, and a more active reason, sharing information with and supporting each other.

Keywords: friendship (友人関係), groups of friends (友人グループ), reasons for belonging to a group of friends (友人グループへの所属理由), adolescence (青年期), educational stage (学校段階), gender (性差)

問題と目的

青年期は人間関係が家族や親を中心とした関係から多様な関係へと広がる時期である。社会的場面での身近な人間関係として友人関係が挙げられる。

友人関係は，1対1の個別の人間関係ばかりではなく，複数のメンバーから成る一定のメンバーで構成される集団的な仲間関係であることが多い。この傾向は特に学校場面において顕著である。本研究の目的は，このような友人グループについて検討することである。

友人グループは児童期後半頃から形成されると言われているが，保坂・岡村（1986）は青年期の仲間関係の発達的変化を①gang-group，②chum-group，③peer-groupの3つの位相から説明している。①gang-groupは小学校高学年頃に現れるグループであり，同年代の同性の仲間により形成され，同じ遊びや行動を共にするなど外面的な同一行動に

よる一体感を重んじる仲間関係である。②chum-groupは中学生頃に現れ，共通の興味や趣味，クラブ活動等を通じて結束し，お互いの共通点，類似性を言葉で確認し合う仲間関係である。Chum（チャム）とは仲良しという意味で，精神医学者のSullivan（1953中井・山口訳1976）は，思春期に見られる同性同年代の友人との親密な関係性をチャムシップと呼び，このチャムシップの形成を通じて自他の理解が深まり，その後の対人関係の発達に重要な役割を果たすとした。③peer-groupは主に高校生以上で見られるようになり，互いの価値観や理想，将来の生き方等を語り合い，お互いの類似性だけでなく，異質性を認め合うことによって互いに自立した個人として共にいることができる仲間関係である。その後，保坂（2000）は，近年の傾向として，これらの位相が変化していることを指摘している。具体的にはgang-groupの消失，chum-groupの肥大化，peer-groupの遷延化について述べており，高校生以上になってもchum-groupが長引き，peer-groupの形成が難しくなっているとしている。このような変化が指摘されてはいるものの，松本（2016）は児童期から青年期にかけての友人関係の発達的変化に関する先行研究をまとめ，これらに共通する結果として「児童期から仲間集団を形成すること，年齢が増すにつれて，同質性や類似性を重視する関係から異質性を認め合い尊重し合う関係へと変化していく」ことを示し，「仲間集団の特徴の違いを考慮すること」の重要性を強調している。

思春期から青年期にかけては親からの心理的自立の時期であり，その過程で青年が感じる孤独感を和らげ，安心感を与えてくれる拠点として，友人グループは重要である。その一方，友人グループは，相互に独立しており，排他的な面をもっているため（佐藤，1995），グループから外されることやグループメンバーから嫌われることに対する不安も高いと言われており（佐藤，1995；大嶽・多川・吉田，2010），友人グループでのトラブルがいじめにつながったり，不登校の要因になる可能性も指摘されている（保坂，2000；伊藤，2002；松本，2016）。

このように，友人グループに所属することは，青年期の適応にとってポジティブ，ネガティブの両側面があると考えられるが，それでは青年は，どのような理由で友人グループに所属しているのであろうか。友人グループに所属する理由について検討した研究として，高校生女子を対象にした佐藤（1995）が挙げられる。佐藤（1995）は，高校生女子227名にグループに所属する理由について尋ねた質問紙調査の結果を分析し，友人グループに所属する理由として「複数からの安全保障の獲得」と「浮いた存在になることの忌避」の2つの理由があることを明らかにした。「複数からの安全保障の獲得」とは，「何かあったときにも支えてくれる人が自分にはいる，そのような安心を求める気持ちを表す因子」と解釈され，「浮いた存在になることの忌避」とは，「まわりから浮きたくない，ひとりでいる人だと思われたくないという気持ちを表す因子」と解釈され，それぞれ，友人グループに所属するポジティブ（積極的）な理由，ネガティブ（消極的）な理由を表していると考えられる。

佐藤（1995）は高校生の女子のみを対象としており，友人グループの閉鎖的，排他的な側面に着目した研究である。これまでに述べたように友人グループが思春期には形成されていること，思春期から青年期にかけて発達的な変化が見られることを踏まえると，中学生や大学生も対象とし，友人グループに所属する理由の発達的変化の検討や友人グループのもつポジティブな側面にも着目する必要があると考えた。

以上より，本研究の目的は，青年期の友人グループの実態についてグループへの所属の有無，グループの構成人数から検討すること，ならびに友人グループに所属する理由について明らかにすることである。さらに，友人グループに所属する理由の学校段階別での違いを見ることで発達的変化を検討し，また性別による違いも検討する。

本研究の仮説は以下のとおりである。

仮説1：多くの生徒，学生が友人グループへ所属しており，友人グループへの所属の有無については，学校段階，性別で差は見られないであろう。

仮説2：友人グループの構成人数については，学

校段階，性別で差は見られないであろう。

仮説 3：友人グループに所属する理由については，佐藤（1995）の明らかにした「浮いた存在になることの忌避」と「複数からの安全保障の獲得」も参考にしつつ，佐藤が示した理由以外にも共にいることの楽しさを求めるといった理由や道具的なサポートを求めるといった理由があると考えた。そこで，友人グループに所属する理由としては，グループにいることで楽しさを感じることができるという「享楽」，友人からのサポートを得ることができるという「サポート希求」，学校生活における必要な情報を得ることができるという「情報共有」，周囲からの目を気にして一人になることを避けたいという「孤立回避」の 4 つの理由があると想定する。

仮説 4：友人グループに所属する理由のうち，「享楽」は学校段階で違いはないであろう。

仮説 5：友人グループに所属する理由のうち，「サポート希求」，「情報共有」は学校段階が高い方が得点が高いであろう。

仮説 6：友人グループに所属する理由のうち，「孤立回避」は学校段階が高い方が低いであろう。

方　法

調査参加者および手続き

中学校，高校，大学の生徒，学生に無記名の個別自記式質問紙調査を実施した。第一著者の知人またはその知人を介して関東圏内にある私立の中学，高校，大学の生徒，学生に調査を依頼し，調査協力に同意した者に直接または郵送で質問紙の配布，回収を行った。750 名に質問紙を配布し，594 名から回答を得た（回収率 79.2%）。調査時期は，2013 年 8 月から 12 月であった。

調査内容

調査参加者の基本属性

学校段階，学年，年齢，性別を尋ねた。学校段階は，（中学／高校／大学）から 1 つ選択してもらった。

友人グループへの所属の有無と構成人数

友人グループへの所属の有無，所属する友人グループの構成人数について尋ねた。

友人グループへの所属の有無については，「あなたは現在，友人グループに所属していますか？」の質問に対して「はい」「いいえ」のどちらかを選択してもらった。「はい」と回答した参加者には，自分を含めた友人グループの人数を回答してもらった。ここでの友人グループとは，「一緒にいる（自分を含める）2 人以上の友達とのグループのこと」と教示した。

友人グループに所属する理由

友人グループへの所属の有無の質問に「はい」と回答した参加者には，「友人グループに所属する理由に関する尺度」（以下，「友人グループ所属理由尺度」とする）の項目に回答してもらった。「友人グループ所属理由尺度」を作成するために 2013 年 5 月から 6 月に 16 歳から 23 歳の女性 21 名に対して，予備調査を行った。インタビュー調査もしくはメールでの調査を行い友人グループに所属する理由について自由に述べてもらった。そこで得られた内容と先行研究（佐藤，1995）を参考に「友人グループ所属理由尺度」の項目を作成した。「享楽」，「サポート希求」，「情報共有」，「孤立回避」の 4 つの所属理由を想定し，計 56 項目の項目を選定した。各項目について，「そう思う（5 点）」，「ややそう思う（4 点）」，「どちらでもない（3 点）」，「ややそう思わない（2 点）」，「そう思わない（1 点）」の 5 件法で回答を求めた。

倫理的配慮

配布した質問紙の表紙に，研究の主旨，倫理的配慮について説明した文書を添付した。第一著者が直接調査への協力を依頼し，質問紙を配布した調査参加者に対しては，口頭および文書で説明を行った。説明の中には，調査の目的，調査結果を研究の目的以外に使用することはないこと，得られたデータは個人が特定されない形にして処理，分析し，研究が終了した時点で消去，破棄すること，調査への参加は任意であり，回答したくない項目は空欄のままでよいこと，本研究に対する問い合わせ先などが含ま

れている。質問紙への回答をもって，調査協力の同意を得たものとみなした。

結　　果

質問紙が回収できた 594 名のうち，回答に不備があった 38 名を除く 556 名（男性 275 名，女性 281 名）を分析の対象とした。本研究の統計分析には SPSS Ver.25 を使用した。

分析対象者の概要

分析対象者 556 名の平均年齢は 17.22 歳（SD=2.81），男性は 17.22 歳（SD=2.58），女性は 17.22 歳（SD=3.02）であり，平均年齢に男女で有意な差はなかった（t (554)=−.03, *n.s.*）。所属は，中学が 124 名（22.3%；男性 52 名，女性 72 名），高校が 227 名（40.8%；男性 123 名，女性 104 名），大学が 205 名（36.9%；男性 100 名，女性 105 名）であった。

友人グループへの所属の有無と構成人数

友人グループに「所属している」と回答した人数を Table 1 にまとめた。

Table 1　友人グループに「所属している」と回答した人数

N=556，人数（%）

	中学 (n=124)	高校 (n=227)	大学 (n=205)	計 (N=556)
男	50 (96.2)	100 (81.3)	91 (91.0)	241 (87.6)
女	63 (87.5)	90 (86.5)	105 (100.0)	258 (91.8)
計	113 (91.1)	190 (83.7)	196 (95.6)	499 (89.7)

友人グループに「所属している」と回答した人は，分析対象者 556 名中の 499 名（89.7%）であり，男性では 241 名（87.6%），女性では 258 名（91.8%）であった。友人グループへの所属の有無には，性別による有意な差は見られなかった（χ^2 (1)=2.64, *n.s.*）。

友人グループの構成人数を Table 2 にまとめた。なお，友人グループの構成人数について回答した人は，友人グループに「所属している」と回答した 499 名中 471 名であった。友人グループの構成人数は全体では 5.82 人（SD=3.69），男性では 6.27 人（SD=4.19），女性では 5.41 人（SD=3.12）であった。中学，高校，大学によって，グループの構成人数が男女で異なるかを検討するために，性別と学校段階を被験者間要因とする二要因の分散分析を行った。その結果，性別の主効果（F (1,465)=11.20, p<.05），学校段階の主効果（F (2,465)=7.28, p<.05），性別と学校段階の交互作用（F (2,465)=6.69, p<.05）がそれぞれ有意であった。交互作用が有意であったため，単純主効果の検定を行った。その結果，男性における学校段階の単純主効果は有意であったが（F (2, 465)=11.95, p<.05），女性における学校段階の単純主効果は有意ではなかった（F (2,465)=0.96, *n.s.*）。また，中学段階における性別の単純主効果は有意であったが（F (1,465)=18.98, p<.05），高校段階における性別の単純主効果は有意ではなく（F (1,465)=0.11, *n.s.*），大学段階における性別の単純主効果は有意ではなかった（F (1,465)=1.43, *n.s.*）。以上の結果から，男性では中学段階が高校段階や大学段階よりも友人グループの構成人数が多く，女性では学校段階で友人グループの構成人数に差は見られないことが示唆された。また，中学段階では男性の方が女性よりも友人グループの構成人数が多いことが示された。

Table 2　友人グループの構成人数

平均値（標準偏差）

	中学 (n=110)	高校 (n=165)	大学 (n=196)	計 (n=471)
男	8.48 (5.70)	5.61 (2.25)	5.68 (4.24)	6.27 (4.19)
女	5.48 (3.87)	5.79 (3.67)	5.07 (1.95)	5.41 (3.12)
計	6.82 (4.98)	5.70 (3.03)	5.35 (3.23)	5.82 (3.69)

友人グループに所属する理由

「友人グループ所属理由尺度」の因子分析

予備調査で作成した「友人グループ所属理由尺度」の各項目の平均値を算出し，平均値±1 SD で天井効果，床効果を検討したところ床効果は見られなかった。天井効果が見られた 15 項目（「趣味についての情報を共有することができるから」，「グループだとお互いをよく知っているので相談しやすいから」，「グループの友達を信頼しているから」，「話題の物語について話すことができるから」，「学校生活が楽しくなるから」，「一緒にいるうちに自然にまとまったから」，「気づいたら

グループになっていたから」,「グループでいると楽しいから」,「興味や関心があることについて情報交換ができるから」,「一人でいるよりも，大勢でいる方がおもしろいから」,「話をする相手が必要だから」,「グループの友達と気が合うから」,「一人でいるとさびしいから」,「みんなでさわげるから」,「いつも一緒にいる人とだと話をしやすいから」）を削除し，残りの 41 項目について主因子法，Varimax 回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況（10.60, 5.38, 2.66, 1.71…）と因子の解釈可能性から 3 因子構造が妥当と考えられた。十分な因子負荷量を示さなかった 8 項目（.40 以下,「一年生の初めに入ったグループだから」,「困ったときに手伝ってもらえるから」,「グループの中では自分の存在を認めてもらえるから」,「なんとなく趣味が合うから」,「決まった人と一緒にいた方が，気が楽だから」,「いろいろなうわさ話を聞くことができるから」,「将来についての話ができるから」,「一緒に登下校できるから」）を削除し，残りの 33 項目について因子数を 3 に設定し，再度同じ手法で因子分析を行った。結果を Table 3 に示す。第 I 因子は 14 項目，第 II 因子は 14 項目，第 III 因子は 5 項目となった。第 I 因子は,「ひとりぼっちだと思われたくないから」,「一人きりでい

Table 3 「友人グループ所属理由尺度」の因子分析結果（主因子法・Varimax 回転後の因子パターン）

項目内容	I	II	III
I 孤立回避（α = .92）			
ひとりぼっちだと思われたくないから	**.82**	.05	.12
友達のいない子だと思われたくないから	**.81**	.04	.08
一人きりでいると，つまらない人だと思われそうだから	**.80**	−.05	.03
グループに入っていないと周囲から浮くから	**.79**	−.02	.15
グループに入っていないと，教室にいづらいから	**.75**	−.06	.07
一人で行動することばかりだと，よくない印象をもたれそうだから	**.72**	−.04	.07
グループに入っていないと，変わった人だと思われそうだから	**.71**	−.05	.09
学校行事などのとき，一人にならずにすむから	**.63**	.08	.13
グループに入ることが当たり前だから	**.62**	.12	.04
周囲の人も友達といるから	**.61**	.11	.21
班分けやグループ作業のとき，あぶれずにすむから	**.59**	.13	.18
一人でいるとさびしいから	**.59**	.16	.02
グループに入ることで，自分が価値ある人間だと感じられるから	**.44**	.15	.18
グループの友達が，グループ意識が強いから	**.41**	.18	.10
II 情緒的サポート（α = .88）			
グループの人には，安心して何でも話せるから	.07	**.74**	.04
悩みごとがあるとき，相談にのってくれるから	.00	**.74**	.11
落ち込んでいてもグループの友達が支えてくれるから	.18	**.67**	.05
個人的なことを相談しやすいから	.07	**.67**	.08
グループの友達とは，お互いになくてはならない存在だと感じあえるから	.13	**.66**	−.14
グループの友達と性格が合うから	−.07	**.61**	.10
グループの友達は，自分を頼りにしてくれているから	.08	**.58**	.08
グループにいることで，落ち着ける場所があると感じることができるから	.25	**.57**	.17
グループの友達と助け合えるから	.09	**.57**	.26
相談相手がたくさんいて頼りになるから	.09	**.53**	.11
一人でいるよりも心強いから	.40	**.42**	.12
休みの日など遊ぶことができるから	.10	**.42**	.09
興味のあることが似ているから	−.12	**.41**	.22
価値観が似ているから	−.10	**.41**	.16
III 情報共有（α = .85）			
試験範囲を教えあえるから	.21	.14	**.77**
授業についての情報を得ることができるから	.12	.05	**.69**
ノートの貸し借りができるから	.26	.17	**.68**
勉強を教えてもらえるから	.15	.17	**.67**
学校生活に必要な情報を得ることができるから	.16	.21	**.65**

ると，つまらない人だと思われそうだから」等，他者からの評価を気にして一人でいることを避けるためという内容の項目から構成されていることから「孤立回避」と命名した。第II因子は，「グループの人には，安心して何でも話せるから」，「悩みごとがあるとき，相談にのってくれるから」等，友人グループに所属することで安心して周囲からサポートを得ることができるという内容の項目から構成されていることから「情緒的サポート」と命名した。第III因子は，「試験範囲を教えあえるから」，「授業についての情報を得ることができるから」等，学校生活で必要な情報を得ることができるという項目から構成されていることから「情報共有」と命名した。各因子のα係数を算出したところ，「孤立回避」はα=.92，「情緒的サポート」はα=.88，「情報共有」はα=.85であり，それぞれ十分な値を示した。

「友人グループ所属理由尺度」の下位尺度得点の算出

「友人グループ所属理由尺度」の各因子に含まれる項目の平均値を算出し，下位尺度得点とした。各下位尺度得点についてTable 4にまとめた。下位尺度間の関連を見るために「孤立回避」，「情緒的サポート」，「情報共有」の3つの下位尺度得点間の相関分析を行った結果，「孤立回避」と「情緒的サポート」間（r=.26），「孤立回避」と「情報共有」間（r=.36），「情緒的サポート」と「情報共有」間（r=.34）にそれぞれ有意な正の相関が確認された（Table 5）。

学校段階別，性別から見た友人グループに所属する理由の分析

学校段階別，性別で友人グループに所属する理由の違いを検討するために，「友人グループ所属理由尺度」の下位尺度得点の平均値と標準偏差を学校段階別，性別で算出した（Table 6）。次に中学，高校，大学によって，友人グループに所属する理由が男女で異なるかを検討するために「友人グループ所属理由尺度」の各下位尺度得点別に学校段階と性別を被験者間要因とする二要因の分散分析を行った。その結果をFigure 1, Figure 2, Figure 3に示す。

「孤立回避」では学校段階の主効果（F（2,490）=4.54, p<.05）が有意であったが，性別の主効果（F（1,490）=0.78, $n.s.$），性別と学校段階の交互作用（F

Table 4 「友人グループ所属理由尺度」の下位尺度得点

平均値（標準偏差）

	孤立回避	情緒的サポート	情報共有
男	2.76（0.80）	3.53（0.70）	3.36（1.07）
女	2.80（0.91）	3.84（0.68）	3.40（0.97）
全体	2.78（0.86）	3.69（0.71）	3.38（1.02）

Table 5 「友人グループ所属理由尺度」下位尺度得点間の相関

	孤立回避	情緒的サポート	情報共有
孤立回避	—	.26**	.36**
情緒的サポート		—	.34**
情報共有			—

Table 6 学校段階，性別ごとにみた「友人グループ所属理由尺度」の下位尺度得点

平均値（標準偏差）

	孤立回避			情緒的サポート			情報共有		
	中学	高校	大学	中学	高校	大学	中学	高校	大学
男	2.46（0.81）	2.82（0.85）	2.86（0.71）	3.66（0.82）	3.54（0.71）	3.45（0.61）	2.75（0.97）	3.50（1.01）	3.54（1.07）
女	2.67（0.98）	2.89（0.80）	2.81（0.96）	3.88（0.89）	3.84（0.59）	3.82（0.61）	3.06（1.07）	3.57（0.85）	3.46（0.97）
全体	2.58（0.91）	2.85（0.83）	2.83（0.85）	3.78（0.86）	3.68（0.67）	3.65（0.63）	2.92（1.04）	3.53（0.94）	3.50（1.01）

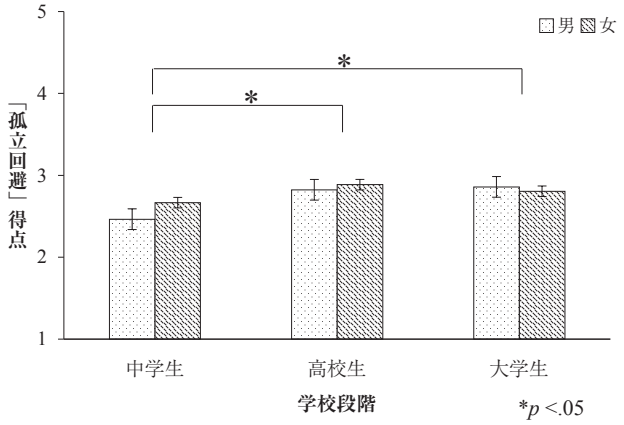

Figure 1　学校段階別，性別ごとにみた「孤立回避」得点の平均値と標準誤差

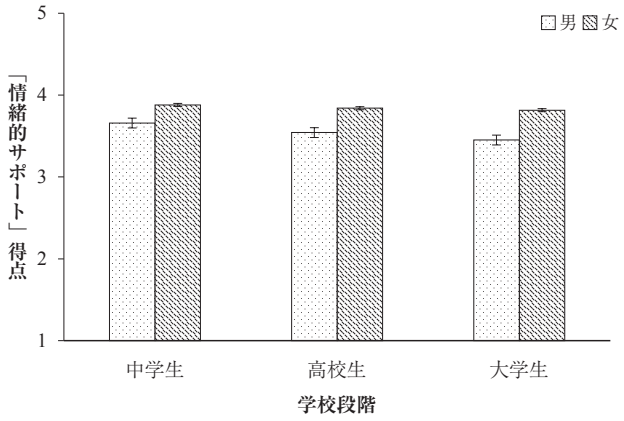

Figure 2　学校段階別，性別ごとにみた「情緒的サポート」得点の平均値と標準誤差

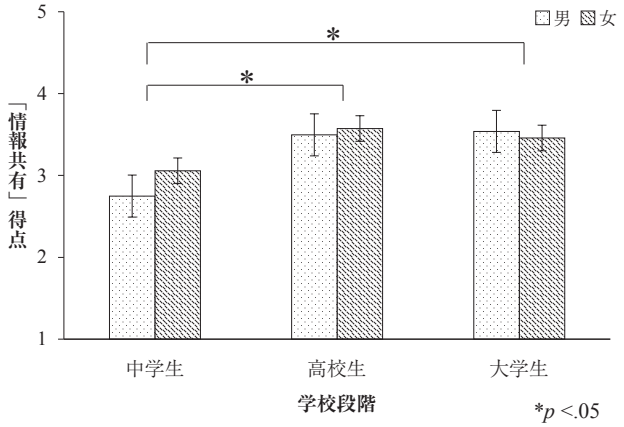

Figure 3　学校段階別，性別ごとにみた「情報共有」得点の平均値と標準誤差

(2,490)＝0.79, *n.s.*）は有意でなかった。そこで Tukey の HSD 法（5%水準）による多重比較を行ったところ，高校段階と大学段階は中学段階より高い得点を示していた（Figure 1)。「情緒的サポート」では学校段階の主効果（F（2,489)＝1.37, *n.s.*），性別と学校段階の交互作用（F（2,489)＝0.39, *n.s.*）は有意ではなく，性別の主効果（F（1,489)＝21.05, $p<.01$）が有意であった（Figure 2)。「情報共有」では学校段階の主効果（F（2,492)＝16.67, $p<.01$）が有意であったが，性別の主効果（F（1,492)＝1.23, *n.s.*），交互作用（F（2,492)＝1.38, *n.s.*）は有意でなかった。そこで Tukey の HSD 法（5%水準）による多重比較を行ったところ，高校と大学段階は中学段階より高い得点を示していた（Figure 3)。

以上の結果から，友人グループに所属する理由は，「孤立回避」と「情報共有」は中学段階より高校段階，大学段階で得点が高く，「情緒的サポート」の得点は女性の方が男性より高いことが明らかになった。

考　　察

友人グループの実態

本研究では，青年期の友人グループの実態について，グループへの所属の有無とグループの構成人数から検討した。友人グループに所属していると回答した者は全体の約 90%であり，中学，高校，大学の各段階でいずれも 80%を超えており（Table 1)，友人グループへの所属の有無には性別による差は見られなかった。従って仮説 1 は支持された。中学生男女を対象に友人グループへの所属の有無を尋ねた石田・丹村（2012）の結果では友人グループに所属していた生徒は 98%であり，また高校生女子の友人グループへの所属について調べた佐藤（1995)，杉浦（2000）の研究でも 90%以上が友人グループに所属していた。本研究においても先行研究と同様に中学生，高校生の多くが友人グループに所属していることが確認された。さらに大学生でも 90%以上とほとんどの者が友人グループに所属しており，学校生活を送る生徒，学生にとっては友人グループの存在が重要な位置を占めていることが推察された。

友人グループの構成人数については，男性では中

学段階が高校段階や大学段階よりも多く，女性では学校段階で差は見られなかった。また，中学段階では男性の方が女性よりもグループの構成人数が多いことが明らかとなった（Table 2）。友人グループの構成人数は学校段階，性別では差が見られないであろうという仮説 2 は支持されなかった。石田・丹村（2012）は，中学生の友人グループの構成人数は男性の方が女性より有意に多いことを報告しており，本研究の結果もこれと一致する。その背景要因として石田・丹村（2012）は，男子集団の方が女子集団と比べてリーダーとフォロワーに分かれたより階層性の高い集団であり，他集団との境界が不明瞭で開放性が高い傾向にあることを指摘している。また，鵜養（2004）は思春期の友だちづきあいは従来から指摘されているように，男子は遊ぶ場や興味ある物事，活動に人が集まる傾向にあり，女子ではグループの中で一緒に行動することをより大切にすることを挙げている。中学生男子の友人グループには児童期後半に見られる gang-group の特徴が残っていることが示唆される。

友人グループに所属する理由

友人グループに所属する理由は，孤立することを避けようとする「孤立回避」，友人から情緒的なサポートを得ようとする「情緒的サポート」，学校生活で必要な情報を得ようとする「情報共有」の 3 つから成ることが明らかとなった（Table 3）。あらかじめ想定していた「享楽」，「サポート希求」，「情報共有」，「孤立回避」のうち，「孤立回避」と「情報共有」はほぼ想定通りの項目でまとめられたため，仮説 3 は部分的に支持されたと言える。しかし，グループに所属し一緒に楽しく過ごしたいという「享楽」として想定していた項目の多くは天井効果が見られたため因子分析からは除外し，それ以外の項目は「サポート希求」として想定していた項目と同じ因子にまとまったため，「情緒的サポート」と命名した。楽しく過ごせる関係としての友人グループは「情緒的サポート」の機能を担っていると言える。なお，「享楽」因子が構成されなかったため，仮説 4 は支持されなかった。

友人グループは友人関係の拠点として大切であり，親密な友人グループの中で情緒的なつながりが得られるという積極的な側面がある一方で，仲間からの評価を気にし，仲間から外れないようにグループに所属することで，自らを守ろうとする消極的な側面があると言われている（大嶽他，2010；佐藤，1995）。本研究においても，友人グループに所属する理由として親密さや情緒的なサポートを求める積極的な側面と，孤立を避けるためという消極的側面があることが確認された。また，佐藤（1995）が示した「浮いた存在になることの忌避」は本研究における「孤立回避」に当てはまり，「複数からの安全保障の獲得」は本研究における情緒的なサポートを求める「情緒的サポート」に相当する。本研究では友人グループに所属する積極的な理由として「情緒的サポート」以外に道具的なサポートを求める「情報共有」があることが明らかとなった。

学校段階別，性別による友人グループに所属する理由の違い

友人グループに所属する理由の違いを性別，学校段階別で検討した（Table 6）。

性別では女性の方が男性よりも「情緒的サポート」理由が高いという結果が得られた。小学生の友人関係（武蔵，2014），中学生の友人関係（石田・丹村，2012）を調べた研究ではいずれも，女子の方が男子よりも友人仲間に対して内面の共有を求める欲求や一緒にいたいという親和志向が高いことを明らかにしている。本研究ではこれらの先行研究より年齢の高い高校生や大学生においても類似した結果が得られた。すなわち，女性は男性と比べて，中学から大学にかけての青年期を通じて一貫して友人グループの中で心理的なサポートを求めていることが明らかになり，それによって心理的に支えられていることが推察された。

また，学校段階による違いとしては，「孤立回避」と「情報共有」が中学段階と比べて高校段階，大学段階で高いことが明らかになった（Figure 1, Figure 3）。学校段階が高い方が「サポート希求」，「情報共有」の得点が高いであろうとした仮説 5 は，一部支

持されたと言える。「情報共有」は，学校生活で必要な情報を得ようとする理由である。中学は，義務教育期間であり，学習カリキュラムは生徒全員に共通しており，学校生活についての情報は教師から与えられることがほとんどであるが，高校，大学になると学習カリキュラムに選択の幅が生じ，学校生活や学習に関して自発的に情報を得なければならない機会が増える。そのため，友人グループで有益な情報を共有することが円滑で充実した学校生活を送るために大変重要になると考えられる。大学生を対象とした難波（2005）や大嶽他（2010）の研究においても大学生にとっての友人グループや仲間関係がもつ意味として，目的や行動を共有すること（難波，2005）や学校生活に必要な情報収集などの道具的な志向性（大嶽他，2010）が指摘されており，本研究の結果もこれらと共通する。一方，学校段階が高い方が「孤立回避」は低いであろうという仮説6は支持されなかった。「孤立回避」が中学よりも高校，大学で高かった理由として，一つには高校，大学になると友人グループのもつ特徴がより chum-group 的な傾向を帯びるようになるからではないかと考える。chum-group は，お互いの共通性，類似性を言葉で確かめ合い，お互いが同質であることを重視するグループであり（保坂，2000），このようなグループでは情緒的な一体感が高まる一方，異質な他者に対する排他性も高まる可能性がある。そのため，仲間外れにされることを避けようとする欲求が高くなるのではないだろうか。2つ目の理由として近年の大学生の友人関係研究で指摘される傷つき回避や気遣いとの関連も考えられる。満野・今城（2016）は，現代大学生の友人関係が友人と親密に付き合い，友人との距離感が近い「親密群」，友人との関係が悪くならないように気を遣い，友人との距離感を保つ「気遣う関係群」，友人と楽しい付き合いを志向せず，親密な付き合いはせずに距離感を保ち，気を遣うことをしない「関係希薄群」の3タイプに分けられることを明らかにした。大学生の中に友人に気を遣い，友人からどのように見られているのかを気にしてしまう群が一定数存在していることは，高校生，大学生が孤立することを避け，自己防衛的な手段として友人グループに所属しようとすることと関連していることが示唆される。さらに SNS との関連も無視できないであろう。SNS 上のつながりから排除されることは「情緒的サポート」も「情報共有」も得られなくなることに直結し SNS でつながる友人グループからの孤立を避ける気持ちが高いことが考えられる。

今後の課題

本研究では，青年期の友人グループに所属する理由を明らかにし，性別，学校段階別の違いを検討した。学生生活を過ごす青年のほとんどが友人グループに所属していることが明らかになり，友人グループでの適応と学校適応とが大きく関連していることは想像に難くない。これまでにも友人関係と精神的健康や学校適応との関連を検討した研究が多くなされてきた（例えば，石本他，2009；満野・今城，2016；永井，2016）。本研究では，精神的健康や学校適応との関連は扱わなかったため，友人グループに所属する理由と精神的健康や学校適応との関連を見ることが必要であろう。

また，グループ内での適応に影響を及ぼす要因としてコミュニケーションスキルや感情の表出等の対処行動が考えられる。そこで今後は，友人グループへの所属理由が友人グループ内での行動スタイルや対処行動とどのように関連するのかを検討することも課題である。

付記

本論文は，第一著者が昭和女子大学人間社会学部心理学科に提出した卒業論文（2013年度）がもとになっている。今回新たに分析した結果を加え，再構成した。

謝辞

本調査にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

保坂亨（2000）．子どもの仲間関係の発達　保坂亨（著）学校を欠席する子どもたち――長期欠席・不登校か

ら学校教育を考える――(pp. 219-238) 東京大学出版会
保坂亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達的・治療的意義の検討　心理臨床学研究, *4*, 15-26.
石田靖彦・丹村明寿香 (2012). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりが学校における規範意識と逸脱行為に及ぼす影響　愛知教育大学研究報告教育科学編, *61*, 117-125.
石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連　発達心理学研究, *20*, 125-133.
伊藤美奈子 (2002). 不登校気分の背景にある休み時間イメージと学校適応, 親友とグループの有無――不登校予備軍に注目して――　お茶の水女子大学人文科学紀要, *55*, 275-286.
松本恵美 (2016). 児童期と青年期における友人関係研究の概観と展望　東北大学大学院教育学研究科研究年報, *65*, 135-145.
満野史子・今城周造 (2016). 大学生の友人関係様式と友人関係における困難および友人関係における方略の関連――関係形成期と関係維持期に着目して――　学苑・人間社会学部紀要, *904*, 21-33.
武蔵由佳 (2014). 児童生徒の友人・仲間関係に対する欲求の検討　早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊, *21*, 83-92.
永井暁行 (2016). 大学生の友人関係における援助要請およびソーシャル・サポートと学校適応の関連　教育心理学研究, *64*, 199-211.
難波久美子 (2005). 青年にとって仲間とは何か――対人関係における位置づけと友だち・親友との比較から――　発達心理学研究, *16*, 276-285.
大嶽さと子・多川則子・吉田俊和 (2010). 青年期女子における「ひとりぼっち回避行動」に対する捉え方の発達的変化――面接調査に基づく探査的なモデル作成の試み――　対人社会心理学研究, *10*, 179-185.
佐藤有耕 (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析　神戸大学発達科学部研究紀要, *3*, 11-20.
杉浦健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係――その発達的変化――　教育心理学研究, *48*, 352-360.
Sullivan, H. S. (1953). *Conceptions of Modern Psychiatry*. New York: W. W. Norton.
(サリヴァン, H. S. 中井久夫・山口隆 (共訳)(1976). 現代精神医学の概念　みすず書房)
鵜養啓子 (2004). いま, 思春期の友だち関係はどうなっているか (特集 思春期の友だち関係)　児童心理, *58*, 1-9.

(すぎた　あやか　　生活機構研究科心理学専攻2年)
(まつなが　しのぶ　　心理学科)
(こうの　よしあき　　東京学芸大学名誉教授)